

# 公演日程

## A program

第1664回 NHKホール  
1/ 9[土] 開演 6:00pm  
1/10[日] 開演 3:00pm

The 1664th Subscription Concert  
on 9th (Sat.) & 10th (Sun.) Jan.  
at 6:00pm (Sat.) 3:00pm (Sun.) in the NHK Hall

指揮 尾高忠明\*

ピアノ 若林 顕\*

コンサートマスター 篠崎史紀

Tadaaki Otaka, conductor

Akira Wakabayashi, piano\*

Fuminori Shinozaki, concertmaster

ヨハン・シュトラウスⅡ世／喜歌劇「こうもり」序曲 (9')

Johann Strauss II (1825-1899)  
"Fledermaus", operetta – Overture

ヨーゼフ・シュトラウス／ワルツ「天体の音楽」作品235 (9')

Joseph Strauss (1827-1870)  
Sphärenklänge, waltz op.235

ヨハン・シュトラウスⅡ世／常動曲 作品257 (3')

Johann Strauss II  
Perpetuum mobile op.257

ヨハン・シュトラウスⅡ世／アンネン・ポルカ 作品117 (4')

Johann Strauss II  
Annen-Polka op.117

ヨハン・シュトラウスⅡ世／ポルカ「観光列車」作品281 (3')

Johann Strauss II  
Vergnügungszug, polka op.281

ヨハン・シュトラウスⅡ世／皇帝円舞曲 作品437 (11')

Johann Strauss II  
Kaiser-Walzer op.437

休憩

Intermission

R.シュトラウス／ブルレスケ (17')\*

Richard Strauss (1864-1949)  
Burleske\*

R.シュトラウス／歌劇「ばらの騎士」組曲 (22')

Richard Strauss  
"Der Rosenkavalier", suite

\*当初出演予定のローレンス・フォスターは、本人の健康上の理由により来日出来なくなりました。代わって尾高忠明が出演致します。なお曲目の変更はございません。何とぞご了承下さい。

# 公演日程

## B program

第1666回 サントリーホール  
1/20[水] 開演 7:00pm  
1/21[木] 開演 7:00pm

The 1666th Subscription Concert  
on 20th (Wed.) & 21st (Thu.) Jan.  
at 7:00pm in the Suntory Hall

指揮 広上淳一  
ヴァイオリン ヴィヴィアン・ハーグナー  
コンサートマスター 篠崎史紀

Jun'ichi Hirokami, conductor  
Viviane Hagner, violin  
Fuminori Shinozaki, concertmaster

武満 徹 / 3つの映画音楽 (1995) (12')

Toru Takemitsu (1930-1996)  
Three Film Scores (1995)

- I 訓練と休息の音楽 —「ホゼー・トレス」から
- II 葬送の音楽 —「黒い雨」から
- III ワルツ —「他人の顔」から

- I Music of Training and Rest — from Jose Torres —
- II Funeral Music — from Black Rain —
- III Waltz — from Face of Another —

ベートーヴェン / ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品61 (42')

Ludwig van Beethoven (1770-1827)  
Violin Concerto D major op.61

- I アレグロ・マ・ノン・トロppo
- II ラルゲット
- III ロンド : アレグロ

- I Allegro ma non troppo
- II Larghetto
- III Rondo : Allegro

休憩

Intermission

プロコフィエフ / 交響曲 第7番 嬰八短調 作品131 (32')

Sergei Prokofiev (1891-1953)  
Symphony No.7 c-sharp minor op.131

- I モデラート
- II アレグレット
- III アンダンテ・エスプレッシヴォ
- IV ヴィヴァーチェ

- I Moderato
- II Allegretto
- III Andante espressivo
- IV Vivace

# 公演日程

## C program

第1665回 NHKホール  
1/15[金] 開演 7:00pm  
1/16[土] 開演 3:00pm

The 1665th Subscription Concert  
on 15th(Fri.) & 16th(Sat.) Jan.  
at 7:00pm (Fri.) 3:00pm (Sat.) in the NHK Hall

指揮 ジョン・アクセルロッド\*  
ピアノ 清水和音  
コンサートマスター 堀 正文

John Axelrod, conductor  
Kazune Shimizu, piano  
Masafumi Hori, concertmaster

チャイコフスキー／スラヴ行進曲 作品31 (10')

Pëter Il'ich Tchaikovsky (1840-1893)  
Marche slave op.31

チャイコフスキー／ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調  
作品23 (32')

Pëter Il'ich Tchaikovsky  
Piano Concerto No.1 b-flat minor op.23

- I アレグロ・ノン・トロツポ・エ・モルト・マエストロ  
—アレグロ・コン・スピリト  
II アンダンティーノ・センブリチェ  
III アレグロ・コン・フォーコ

- I Allegro non troppo e molto maestoso –  
Allegro con spirito  
II Andantino semplice  
III Allegro con fuoco

休憩

Intermission

チャイコフスキー／バレエ音楽「くるみ割り人形」  
第2幕 (40')

Pëter Il'ich Tchaikovsky  
“The Nutcracker”, ballet – Act II

〔第2幕〕／第3場

- I 情景 (砂糖の山の魔法の城で)  
II 情景 (クララと王子)  
III ディヴェルティスマン  
a. チョコレート (スペインの踊り)  
b. コーヒー (アラビアの踊り)  
c. お茶 (中国の踊り)  
d. トレパーク (ロシアの踊り)  
e. あし笛の踊り  
f. ジゴリーニョおばさんとピエロ

IV 花のワルツ

- V パ・ド・ドゥー — 序奏 — ヴァリアシオン (第1) タランテラ  
— ヴァリアシオン (第2) こんぺい糖の精の踊り — コーダ  
VI 終わりの円舞曲と大詰め

[Act 2]/Scene 3

- I Scene (In the magic castle on the sugar  
mountain)  
II Scene (Clara and the prince)  
III Divertissement  
a. Chocolate (Spanish dance)  
b. Coffee (Arabian dance)  
c. Tea (Chinese dance)  
d. Trepak (Russian dance)  
e. Dance of the reed-pipes  
f. Mother Gigogne and the clowns  
IV Waltz of the flowers  
V Pas de deux – Intrada – Variation 1  
Tarentelle – Variation 2 Dance of the  
sugar-plum fairy – Coda  
VI Waltz finale and apotheosis

\*当初出演予定のローレンス・フォスターは、本人の健康上の理由により来日出来なくなりました。代わってジョン・アクセルロッドが出演致します。なお曲目の変更はございません。何とぞご了承下さい。

## 今月の開演前の室内楽

Aプロ	1/ 9(土) 5:15pm~ 10(日) 2:15pm~
Cプロ	1/ 15(金) 6:15pm~ 16(土) 2:15pm~

<出演> 横川晴児(クラリネット)、店村眞積(ヴィオラ)  
金崎美和子(ピアノ)

<曲目> ブルッフ／クラリネット、ヴィオラ、ピアノのための  
8つの小品 作品83 から第1、2、6、7番

<場所> NHKホール2階北側ロビー



©Masahide Sato

指揮 conductor  
**尾高忠明**  
Tadaaki Otaka

1947年、日本交響楽団(NHK交響楽団の前身)の専任指揮者・尾高尚忠を父に鎌倉で生まれた。桐朋学園で齋藤秀雄に師事。1972年からウィーン国立音楽大学でハンス・スワロフスキーに学ぶ。

1974~1991年まで東京フィルハーモニー交響楽団の常任指揮者を務める(現在は桂冠指揮者)。1992~1998年までは読売日本交響楽団の常任指揮者(現在は名誉客演指揮者)。1995年、紀尾井シフォニエッタ東京の創設に際し、ミュージック・アドヴァイザー&首席指揮者を務める。1998年、札幌交響楽団の常任指揮者に就任し、2004年からは音楽監督として札幌を率いている。現在、新国立劇場の芸術参与と合わせて、芸術監督代行も務める。2010年9月に同劇場オペラ部門芸術監督に就任する予定。

海外では、1987年にBBCウェールズ交響楽団の首席指揮者に就任(1996年からは桂冠指揮者)。ロンドン交響楽団、BBC交響楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、バーミンガム市交響楽団などに客演している。

NHK交響楽団との関係は長い。桐朋学園大学在学中の1968年にN響の指揮研究員となり、1971年にN響の演奏会にデビュー。1974年にはN響の定期公演に登場。近年はしばしば共演している。定期公演には、2004年2月、2007年6月、2008年5月、2009年5月に出演し、エルガーの《交響曲第1番》と《第2番》、ブルックナーの《交響曲第8番》などで円熟味を増した指揮を披露した。今回は、シュトラウス兄弟のワルツやポルカに尾高が得意とするリヒャルト・シュトラウスの作品が加わったニューイヤー・コンサート。新年にふさわしい華やかな演奏が期待できそうだ。2010年からN響正指揮者となる。

(山田治生)



©Greg Sailor

指揮 conductor  
**広上淳一**  
Jun'ichi Hirokami

2005年12月のハイドンのオラトリオ《天地創造》や2003年11月のマーラーの交響曲《大地の歌》でNHK交響楽団と記憶に残る名演を繰り広げた広上淳一。ますます充実度を高めるマエストロが、およそ4年振りにN響定期公演に戻ってくる。

1958年東京生まれ。東京音楽大学指揮科に学ぶ。1984年、第1回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクールで第1位獲得。そのとき審査員の1人であったアシケナージが感銘を受け、1985年のN響とのコンチェルトの指揮に広上を抜擢した（このときが広上とN響との初共演）。

1991年から1995年までスウェーデンのノールショピング交響楽団の首席指揮者、1991年から2000年まで日本フィルハーモニー交響楽団の正指揮者、1998年から2000年までオランダのリンブルク交響楽団の首席指揮者、2006年から2008年まで米国のコロンバス交響楽団の音楽監督を歴任。2008年から京都市交響楽団の常任指揮者を務めている。ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン交響楽団、モントリオール交響楽団、ロンドン交響楽団などの一流楽団に客演。2007年にはサイトウ・キネン・オーケストラを指揮した。オペラでは《仮面舞踏会》《リゴレット》《椿姫》《トスカ》《フィガロの結婚》《利口な女狐の物語》などを指揮。また、東京音楽大学教授を務め、後進の指導にも取り組んでいる。

今回は、広上が近年積極的に取り組んでいる武満徹やプロコフィエフの音楽を披露する。20世紀後半に書かれたモダンな曲ではあるが、心にしみる美しい旋律も現れる2人の作品を広上は得意としている。

(山田治生)



指揮 conductor  
**ジョン・アクセルロッド**  
John Axelrod

テキサス州ヒューストン生まれ。ハーヴァード大学を1988年に卒業した。指揮の師にはクリストフ・エッセンバッハやイリヤ・ムーシン等が、作曲の師にはペーター・リーバーソンやレナード・バーンスタイン等がいる。

アクセルロッドは、世界のオーケストラ界で着実に実力を認められてきた若手指揮者の1人で、ここ数年の国際的活躍はめざましい。本年9月の新シーズンからフランス国立ロワール管弦楽団音楽監督への就任が決まっているが、すでに2004年からスイスのルツェルン交響楽団および同劇場音楽監督兼首席指揮者の任に就いている。昨シーズンの2008-2009年には、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、ベルリン歌劇場管弦楽団、ロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団等にデビューし、パリ管弦楽団、ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮。今シーズンの2009-2010年にはシュトゥットガルト・フィルハーモニー、ハンブルク北ドイツ放送交響楽団にデビュー。オペラの指揮でも活躍し、バーンスタイン《キャンディード》のシャトレ座およびミラノ・スカラ座初演、ブレゲンツ音楽祭でのクルシェネック《聖ステファン大聖堂の周りで》(新演出)の他、ルツェルンではモーツァルトのオペラも指揮している。

地元ヒューストンでは若い世代への音楽教育等を推進するNPO「OrchestraX」を1996年に創立し、活動への評価も高い。

録音も活発で、近年は昨年10月定期にも登場して記憶に新しいW.リームの新作《ソット・ヴォーチェII》やファジル・サイのヴァイオリン協奏曲等がリリースされている。

現在の拠点はルツェルンとストラスブール。世界第一線の若手の初登場に期待は大きい。

(小倉多美子)

ピアノ piano

## 若林 顕

Akira Wakabayashi



日本を代表する実力派ピアニストとして確固たる歩み続ける若林顕。N響に初登場したのは、1987年1月、外山雄三のもとでの公演だった。

東京生まれ。東京藝術大学を経て、ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学およびベルリン芸術大学院卒業。師には田村宏、ハンス・ライグラフ諸氏が名を連ねる。芸大入学前の1982年第51回日本音楽コンクールピアノ部門第2位、そしてザルツブルク留学中の1985年に第37回ブゾーニ国際ピアノ・コンクールで第2位、1987年には、弱冠22歳でエリザベト王妃国際音楽コンクール第2位に輝き、一躍、脚光を浴びることになる。以後、N響をはじめとする国内の主要オーケストラ、スコティッシュ・チェンバー・オーケストラ、パドゥルー管弦楽団、ノールショピング交響楽団、サンクト・ペテルブルク交響楽団と共演。内外一流奏者たちからの信頼も厚く室内楽にも定評があり、コリア・ブラッハー（ヴァイオリン）、ステイーヴン・イツサーリス（チェロ）、フランソワ・ルルー（オーボエ）、ラデク・バボラク（ホルン）、ライブツィヒ弦楽四重奏団、ウィーン八重奏団、

そして、日本を代表するチェリスト堤剛のプロデュース・シリーズでも度々共演者を務めている。

スターとして華やかな活動を行う一方、自身が行うシリーズ——1999年から2年半かけた「ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会」（2002年ベートーヴェン後期のソナタを携えカーネギーホールにデビュー）、2007年秋の「ヴィルトゥオーゾ・プログラムによる3連続演奏会」、また2009年9月名古屋で10年ぶりに開催したベートーヴェン・ピアノ・ソナタ全曲演奏会等々——では、研鑽に基づく味わい深い表現で実力派としての地歩を確かなものにしてきた。近年、ピアノ協奏曲の弾き振りを中心とした指揮活動で新境地も拓いている。

1992年出光音楽賞、1998年モービル音楽賞奨励賞、2004年ホテルオークラ賞受賞。現在、桐朋学園大学院大学教授、桐朋学園大学特任教授、国立音楽大学招聘教授も務める。

(小倉多美子)

ヴァイオリン violin

## ヴィヴィアン・ハーグナー

Viviane Hagner



©Marco Borggreve

ヴィヴィアン・ハーグナーは1976年ミュンヘン生まれで、現在、最も声価の高い若手ヴァイオリニストの1人。12歳でデビューし、1990年にはメータ指揮のもと催された、ベルリン・フィルハーモニー交響楽団&イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団の歴史的合同演奏会に13~14歳の若さで登場、サン・サーンスの《序奏とロンド・カプリチオーソ》を弾いている。1999年、ニューヨークの「モーストリー・モーツァルト・フェスティヴァル」において大家ズーカーマン（ヴィオラを担当）と共にモーツァルトの《協奏交響曲》を演奏した頃には、もはや評価が定まっていた。2001年1月には初来日し、アルブレヒト指揮・読売日本交響楽団とモーツァルトの《協奏曲第3番》を演奏した。その前後からこんにちまで彼女が共演した指揮者にはアバド、アシュケナージ、バレンボイム、エッシェンバッハ、シャイー、デュトワ、マゼールなどがおり、近年ではケント・ナガ

ノ、ビシュコフなども数えられる。当然、共演したオーケストラも、ベルリン・フィル、ボストン交響楽団以下、世界の一流団体を幾つも挙げるができる。

ハーグナーはレパートリーの上でも広汎なものを持ち、古典派、ロマン派のスタンダードな作品はもとより、たとえばグバイドゥーリナ、ハルトマン、ルトスワフスキ、ウンスク・チンの各協奏曲といった、現代の楽曲にも鋭い理解力、表現意欲を示している。このたび1月のNHK交響楽団定期公演ではベートーヴェンの協奏曲を弾くが、この名曲の演奏にかけても、かねがね定評のあるところ。海外の演奏会評には「すぐれて知的」と言い、またある時は「非常に情熱的」と言うが、そのどちらも真実に違いない。それだけ多面的でスケールの豊かな演奏を披露する芸術家で、ヴィヴィアン・ハーグナーはあるのだから。

(濱田滋郎)

ピアノ piano

**清水和音**

Kazune Shimizu



©K.Miura

2007年6月定期のラフマニノフ《ピアノ協奏曲第3番》が記憶に新しい清水和音。今回はニューイヤーにふさわしく、華やかなチャイコフスキー《ピアノ協奏曲第1番》で登場する。

1981年ロン・ティボー国際コンクールに優勝したのが弱冠20歳のとき。日本人の優勝としては1959年の松浦豊明氏以来という偉業を成し遂げた、いわゆる甘いマスクの逸材の出現に、清水和音旋風が吹いた。

帰国後すぐ、1982年1月の「若い芽のコンサート」に出演。これがN響との初共演になる。直後に行ったデビュー・コンサートは早々にソールド・アウト、若い女性が多数押しかけ、まさにスター・ピアニスト登場の華やかさに楽壇も世間も沸いた。同年には「プラハの春」音楽祭に出演し、1984年にはブラティスラヴァ音楽祭のオープニングを飾り、ミュンヘンでもデビュー、1986年にはロジェストヴェンスキーの振るロンドン交響楽団と共演しロンドン・デビューを果たし『デイリー・テレグラフ』紙に取り上げられて好評を得るなど、国際的にも第1級のキャリアを急速に築いていった。

録音も1982年、ソニー・ミュージックか

らリストの《ピアノ・ソナタ》やブラームスの《ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ》等の大曲4曲でデビューCDをリリースし、協奏曲は、マイケル・ティルソン・トーマス指揮のロンドン響とチャイコフスキー、ラフマニノフ、リストのピアノ協奏曲を収録。新人ばなれした選曲・収録が注目を集めた。

そして、次代を担うピアニストの地位を不動のものにしていったのが、1995年秋から2年にわたって紀尾井ホールで行われたベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全曲演奏会。各誌・紙が絶賛し、そのライヴ録音も高く評価された。

録音では、2004年から進行中の「一人のアーティストによるシヨパン完全作品集」が、『レコード芸術』誌の特選盤に。2009年2月発売の「マイ・フェイヴァリッツ」も同誌特選盤になるなど、その円熟した技巧と詩情を絶賛する声は高い。

室内楽における信望も厚く、堀正文、小林美恵、漆原啓子（ヴァイオリン）、宮本文昭（オーボエ）、藤原真理、趙静（チェロ）、河野克典（バリトン）、ベルリン・フィル八重奏団等と共演している。

（小倉多美子）

## ヨハン・シュトラウスⅡ世 喜歌劇「こうもり」序曲

本日の定期演奏会は、「シュトラウスとシュトラウス」、すなわち「Strauß & Strauss」という凝ったプログラミングである。「B」のほうのシュトラウスは、ウィーンのリッパハルト一家。「ss」のほうは、ドイツの管弦楽の大御所である。名字のつづりが違うので、当然、親戚関係はまったくない。

本日前半のプログラムは、NHKの衛星生中継でもおなじみの、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の「ニューイヤー・コンサート」を意識したプログラミングであろう。じつは、喜歌劇《こうもり》は、本場ウィーンでは大晦日に上演するのが恒例となっており、それに引き続いてStrauß一族のリッパハルト・ポルカを中心とした演奏が「新春コンサート」としてなされる。

ヨハン・シュトラウスⅡ世（1825-1899）は、言うまでもなく「ワルツ王」としてその名が知られるが、喜歌劇（オペレッタ）の作曲も重要で、なかでも《こうもり》はオペレッタ史を代表する作品だ。ウィーン宮廷歌劇場（今日の国立歌劇場）ではオペレッタは上演しないことになっているのだが、この《こうもり》だけは特別扱いで、人気演目となっている。レパートリー化したのはかのマーラー（1860-1911）で、彼が同歌劇場の音楽監督をしていた1897年の

ことである。

ちなみに、シュトラウスⅡ世が生前最後に指揮をしたのも、この《こうもり》序曲であった（1899年5月22日）。彼はそのわずか12日後、6月3日に肺炎のため亡くなった。

《こうもり》は、仮装舞踏会で酔っ払ってこうもりの格好をしたまま路上に置き去りにされたファルケ博士が、悪友アイゼンシュタイン男爵に偽パーティを仕掛けて、おもしろおかしく復讐を果たすという、抱腹絶倒のストーリー。序曲はオペレッタ本編の聴きどころのメドレーで、6回の鐘の音も、偽パーティで朝6時まで飲み明かしたことを示している。

**作曲年代**：1873年

**初演**：1874年4月5日、ウィーンのアム・デア・ウィーン劇場

**楽器編成**：フルート2（ピッコロ1）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、チャイム、弦楽

（野本由紀夫）

## ヨーゼフ・シュトラウス ワルツ「天体の音楽」作品235

ヨーゼフ・シュトラウス(1827-1870)は、ヨハン二世のすぐ下の弟で、兄弟のなかではもっとも繊細な歌心にあふれているため、「舞踏曲のシューベルト」などとも称される。

ウィーンでは、謝肉祭シーズン(1月から2月)にはバル(舞踏会)が連日開かれるが、1868年のテーマが「天体の音楽」だった(主催はウィーン大学の医学生たち)。そのために作曲されたのがこの曲で、彼の作品のなかでは最も演奏される人気曲である。

宇宙というと、ホルスト(1874-1934)の組曲《惑星》を思い浮かべる方も多だろうが、ホルストでは占星術との関係が深い。それに対し、ヨーゼフのほうはドイツ語の原題が「スフェーレン・クレンゲ」つまり「天空の響き」といったニュアンスであり、古代ギリシャのピタゴラス(前582-前496)の「アストラムジコ(天体の音楽)」という説に連なる作品なのだ。

これは、宇宙は数比的な「ハルモニア(調和)」で満たされており、天体が動くと音が生じるという考えである。この思想は西洋では脈々と引き継がれ、中世になると「ムジカ・ムンダーナ(天体の音楽=宇宙の調和)」「ムジカ・フマーナ(人間の音楽=人体と魂の調和)」「ムジカ・インストゥル

メンターリス(いわゆる音楽)」と分類され、音楽を物理学的に研究すれば宇宙の秩序も解明されると考えられた。音楽は、理系の学問だったのである。

この「天体の音楽」の思想は、すでに科学万能となった19世紀のロマン主義時代になると、むしろ詩的でロマンチックなイメージとして芸術家に好まれ、ヨーゼフの作品が生まれることとなった。

**作曲年代**：1867～1868年頃。(ウィーン大学) 医学生に献呈

**初演**：1868年1月21日、ウィーンのゾフィエンザール

**楽器編成**：フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、ハープ1、弦楽

(野本由紀夫)

## ヨハン・シュトラウスⅡ世 常動曲 作品257

《常動曲》の原題は「ペルペトゥウム・モビレ」で、「永久に動き続ける」という意味。そのため「無窮動」と訳されることもある。かつて民放のオーケストラ番組のテーマ曲にもなっていたため、40歳以上の世代には懐かしい曲かもしれない。

曲は1861年、シュトラウス36歳のときの作品。産業革命による機械化の時代を象徴する作品とも言われる。ヨハンもヨーゼフも、兄弟そろってウィーン的高等工業学校の出身であり、科学技術に接する機会は多かった。実際、この学校の舞踏会のために、前年1860年には《加速度円舞曲》作品234という次第にテンポを上げてゆくワルツも作曲されている。

《常動曲》は、8小節の主題が24回さまざまな楽器で姿を変えながら変奏されていくのだが、明確な終わりが書かれておらず、いつまでも繰り返し、永久に演奏し続けられる。おそらく当時しきりと話題になっていた「永久機関」をイメージしたのであろう。「永久機関」とは、外部からエネルギーを補わなくても、永遠に運動し続ける機械装置のことで、これは古代からの科学者の夢であった（現在では、熱力学の法則からいって、経験的には実現不可能とするのが一般的）。

この曲の楽譜の最後には「あとは自由

に」とあり、どのように終わらせるのか、本日の指揮者の動作や発言にぜひご注目を。

**作曲年代**：1861年

**初演**：1861年4月4日、ウィーンのシュヴェンダー・レストラン

**楽器編成**：フルート2（ピッコロ1）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン1、ティンパニ1、ハープ1、グロッケンシュピール、トライアングル、タムタム、弦楽

(野本由紀夫)

## ヨハン・シュトラウスⅡ世 アンネン・ポルカ 作品117

ポルカは、ボヘミア地方（チェコ）を起源とする急速な2拍子の舞曲で、カップルで踊る。1830年ごろに発生し、すぐにヨーロッパ全土に広まったらしい。ただし、《アンネン・ポルカ》は、ゆっくりと優雅に踊る「フランス風ポルカ」のスタイルで作曲されている。生涯に125曲にも上るフランス風ポルカを書いたシュトラウスだが、もっとも親しまれている作品の1つである。

曲は作曲者25歳のときの作品で、細かな成立事情は明らかになっていない。かつては、グラーツ市のアンネン・ザールという舞踏会場で初演されたからとも言われ、この曲の人気のために、シュトラウスは出入りを禁じられていた宮廷舞踏会への出演もなかったという（宮廷への初出演は1852年1月14日）。

しかし今日では、おそらく7月26日の「聖アンナの聖者祝日」のために作曲したと考えられている。ちなみに聖アンナは、聖母マリアの母である。初演は同月24日に、ウィーンのプラーター公園内の建物「ツム・ヴィルデン・マン」（野外ステージ）で行われた。

なお、父ヨハン・シュトラウスⅠ世（1804-1849）にも皇后 MARIA・アンナに捧げた《アンネン・ポルカ》作品137（1842）

があるため、父の作品は《敬愛なるアンネン・ポルカ》と呼ばれて区別されている。

**作曲年代**：1852年

**初演**：1852年7月24日、ウィーンのプラーター公園野外ステージ

**楽器編成**：フルート1、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン1、ティンパニ1、大太鼓、小太鼓、シンバル、弦楽

（野本由紀夫）

## ヨハン・シュトラウスⅡ世 ポルカ「観光列車」作品281

19世紀は「鉄道の時代」である。とりわけ19世紀半ばから、オーストリアの鉄道網は急速な発展を遂げ、なかでも1854年のゼメリング鉄道（日本の感覚で言うと、ゼメリング線）の開通は画期的だった。というのも、アルプス越えをするこの鉄道は、世界初の山岳鉄道だったからである。

オーストリア国有鉄道にはウィーンからイタリアのトリエステ（当時はオーストリア領）へ向かう南部鉄道というのがあるが、そのうち分水嶺を越える区間がゼメリング鉄道と呼ばれ、高低差450メートルの山岳地帯を縫うようにして走る。16ほどのトンネルと高架橋、100を超える石橋があるが、路線の最高地点は898メートルなので、想像されるほど断崖絶壁のアルプス越えというわけではない。

ポルカ《観光列車》は、ゼメリング鉄道の開通10周年に作曲された。ポルカの分類としては「速いポルカ」である。一聴してわかるとおり、トライアングルは発車ベルや警報を表し、列車の走るさまはホルンで示されていよう。頻繁な転調は、目の前に広がる絶景の変化を表しているのかもしれない。わずか3分程度の小品だが、鉄道旅行の楽しみが表現されていよう。

ところが、ヨハン・シュトラウスⅡ世自身は、鉄道が大嫌いだっただらしい。車内で

取り乱したり、ゼメリング鉄道でもあれほど高いところを列車で行くと聞いただけで怖がったという。

なお、ゼメリング鉄道は、全路線が世界遺産に登録されている。

**作曲年代**：1863～1864年頃。産業会社協会に献呈

**初演**：1864年1月19日、ウィーンの宮廷舞踏会場（レドゥーテンザール）

**楽器編成**：フルート1、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン1、ティンパニ1、大太鼓、小太鼓、グロックケンシュピール、トライアングル、シンバル、シャフナーホーン、弦楽

(野本由紀夫)

## ヨハン・シュトラウスⅡ世 皇帝円舞曲 作品437

「ワルツ王」の十大ワルツのなかでも、とりわけ人気のある作品。導入部の静かな行進曲にはじまり、華麗なワルツが約10分にわたって繰り広げられる。

かつてはオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフⅠ世の在位40周年(1888)を記念して作曲されたといわれてきたが、実際に作曲されたのは記念の翌年の1889年で、ベルリンを首都とするプロイセンの王宮が落成したころである。10月19日の落成式ではオール・シュトラウス・プログラムが生まれ、100人もの大オーケストラを作曲家自身が指揮をした。21日にも演奏会があり、そのときに《皇帝円舞曲》が演奏され熱狂的に迎えられた。

ちなみに、その初演場所はベルリンの庭園レストラン「ケーニヒスバウ」で、21日の演奏会というのは、その開店披露舞踏会だった。ヨハンは、そのレストランの大株主であった。

《皇帝円舞曲》にもともと付けられていたタイトルは「手に手を取り合って(Hand in Hand)」で、ドイツ皇帝ウィルヘルムⅡ世がオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフⅠ世を表敬訪問した際に、両者が手に手を取り合うように、という意図も込められていたらしい。堂々たる風格を備えたワルツである。

作曲年代：1889年

初演：1889年10月21日、ベルリンの庭園レストラン「ケーニヒスバウ」

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、大太鼓、小太鼓、ハープ1、弦楽

(野本由紀夫)

## R. シュトラウス ブルレスケ

1885年、21歳のリヒャルト・シュトラウス(1864-1949)は、ハンス・フォン・ビューローが音楽監督を務めていたマイニンゲンのオーケストラに副指揮者として赴き、10月25日、ブラームスが指揮する《交響曲第4番》の初演に立ち会っている。若い指揮者として多忙を極めたこの時期に作曲されたのは、《ブルレスケ》を含め、わずかしかない。

《第4番》の興奮冷めやらぬなか、早くも翌月には《スケルツォ》という題名の単一楽章の作品を書きはじめ、翌1886年2月にはこれを完成させる。ビューローに献呈するはずだったが、自分の小さい手には弾きこなせない、という理由から初演は断られた。マイニンゲンのオーケストラにとっても演奏困難で、しばらくこの作品はお蔵入りとなる。1889年、シュトラウスはワイマール宮廷歌劇場の指揮者として赴任。同地で知り合ったピアニストのオイゲン・ダルベールがこの曲に惚れ込み、初演の運びとなった。曲名もスケルツォとほぼ同じ「諧謔」を意味する《ブルレスケ》とされる。

この曲には、シュトラウスがマイニンゲンで出会ったブラームスの影響がいきわたっている。《ピアノ協奏曲第2番》と同じ二短調の第2楽章(スケルツォ)に直接

の範をとったと指摘されることが多いが、筆者はむしろ、二短調の《ピアノ協奏曲第1番》の激情とも相通ずる部分が多いのではないかと考える。冒頭の4つの音によるティンパニのソロから曲をはじめ、という斬新なアイディアも優れており、父フランツにも自慢しているほど。このティンパニとピアノ・ソロが、対話を楽しむかのように曲を牽引する。はじめの曲名こそ「スケルツォ」だったが、曲全体は緩やかなソナタ形式であり、第1主題の登場回数を考えると、ロンド・ソナタ形式ともとれる。躍動的で下降する半音階を駆使した第1主題と、これを穏やかに変奏した弦楽器主体の第2主題の対比は実に美しい。静かに曲を終わらせるやり方は、はやくも後年の交響詩の萌芽が感じられる。

**作曲年代**：マイニンゲン、1885年11月～1886年2月24日

**初演**：アイゼナハ(市立劇場)、1890年6月21日。ピアノ・ソロ：オイゲン・ダルベール、指揮：リヒャルト・シュトラウス

**楽器編成**：フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ1、弦楽、ピアノ・ソロ

(広瀬大介)

## R. シュトラウス 歌劇「ばらの騎士」組曲

20世紀に入って作られたオペラのなかでも、おそらく最高の人気と上演回数を誇っているであろうリヒャルト・シュトラウスの《ばらの騎士》。物語の舞台はマリア・テレジア女帝の治める18世紀のウィーン。陸軍元帥・侯爵夫人マリー・テレーズ・ウェルデンベルクは夫の留守中に、愛人であるロフラーノ伯爵家の跡継ぎオクタヴィアンと情熱的な愛の一夜を明かす。そこへ、田舎ケルンテンからやってきたオックス・フォン・レルヒェナウ男爵が登場。武器の売買で財産を成し、貴族の爵位を手に入れた商人ファーニナル家の娘ゾフィーと婚約するために（そしてその財産を手に入れるために）、ウィーンへとやってきたと告げる。オクタヴィアンは婚約の誓いである「銀のばら」を持ってファーニナル家を訪れるが、当のゾフィーに一目惚れ。ゾフィーも、不作法で女にだらしないオックスに愛想を尽かす。オクタヴィアンは罫を仕掛け、オックスとゾフィーの結婚をご破算にすることに成功。元帥夫人は、若い2人の前途を祝して2人を結びつけ、自らの恋にも幕を引く。第1幕の最後に置かれた元帥夫人の別れの決断、そして第3幕最後の女声による三重唱によって、これまでどれだけ多くの観客の紅涙が絞られたことだろう。

1911年の初演直後から、オペラの聴き所を集めたオーケストラ組曲がさまざまな編曲で登場し、シュトラウス自身も曲中のワルツを集めた2種類のメドレーを編曲した。現在オーケストラ・ピースとしてもっぱら演奏されるのは、1945年にブージー&ホークス社から出版された「組曲」である。ところが、どのような資料をみても、それがシュトラウス自身の編曲なのか、あるいは第三者によるものなのかが、はっきり明示されていない。研究者の間では、この作品の編曲はポーランドの指揮者アルトゥール・ロジンスキによって、1933年から1945年の間に、亡命先のロンドンでなされたもの「らしい」とされている。今となっては、その真偽はもはや確かめようがない。

ただ、本当にシュトラウスが手がけたのかどうかは、作品自体がその答えを語っている。シュトラウス自身がこの種の編曲ものを手がける際は、声楽の含まれない間奏曲や前奏曲を細切れに並べ、つなぎ目の補筆は最小限にとどめた。この組曲は、シュトラウスならば用いないだろう第2幕の二重唱や第3幕の三重唱などがそのまま登場し、曲間もどこかぎこちない。とりわけ、ハ長調のファンファーレが鳴り響くシンプルな終結部（オペラには含まれ

ない)は、モチーフや対位法的技法から見ても創意に欠け、およそシュトラウスの個性が反映された音楽とは考えがたい。この編曲がシュトラウス以外の人物によって行われたことは、ほぼ疑いないと筆者は考える。

曲は以下のような順序で推移する。最後のオックスのワルツを除けば、ほとんどオペラの筋書き通りに曲が並べられているが、第3幕の三重唱の音楽に入る前に、第2幕冒頭の音楽がつなぎとして挿入されている。

第1幕:前奏曲 → 第2幕:銀のばらの献呈場面とそれに続くオクタヴィアンとゾフィーの二重唱 → その2人がこっそり逢引をしているところをヴァルツァッキとアンニーナに捕まる場面 → オックスのワルツ《わしと一緒にならば *Mit mir*》 → 第3幕:元帥夫人とオクタヴィアン、ゾフィーの三重唱 → オクタヴィアンとゾフィーの二重唱 → オックスが退場する際のワルツ → フィナーレ(オクタヴィアンのモチーフを援用したオリジナルの旋律)

作曲(編曲)年代:1933~45年頃

初演:ウィーン(コンツェルトハウス)、  
1946年9月28日。指揮:ハンス・  
スワロフスキー

楽器編成:フルート3(ピッコロ1)、オーボエ

3(イングリッシュホルン1)、クラリネット2、Esクラリネット1、バスクラリネット1、ファゴット3(コントラファゴット1)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、トライアングル、タンブリン、大太鼓、小太鼓、ラチェット、グロッケンシュピール、シンバル、チェレスタ1、ハープ2、弦楽

(広瀬大介)

武満 徹

## 3つの映画音楽(1995)

武満徹(1930-1996)が音楽を担当した映画の音楽を演奏会用にまとめた作品。次の3曲からなる:「訓練と休息の音楽(映画「ホゼー・トレス」から)」「葬送の音楽(映画「黒い雨」から)」「ワルツ(映画「他人の顔」から)」。映画音楽としての作曲年代は隔たっているが3曲はいずれも弦楽合奏のために書かれ、各作品の前後にも弦楽合奏のための作品が作曲されている。たとえば、映画「ホゼー・トレス」(1959)の2年前には武満のデビュー作の《弦楽のためのレクイエム》(1957)が初演されている。

映画「他人の顔」(1966)はデビューからほぼ10年後の作で、その2年前には、砂の動きを弦楽合奏の緻密な多声的手法で表した映画「砂の女」(1964)が書かれ、その手法は、琵琶、尺八、オーケストラのための《ノヴェンバー・ステップス》(1967)の弦楽器に受け継がれる。その20年後には、ロシアの映画監督アンドレイ・タルコフスキーを追憶する、ヴァイオリン・ソロと弦楽合奏のための《ノスタルジア》(1987)、その2年後に映画「黒い雨」(1989)が書かれている。

このように武満は、創作活動の新たな局面で、あるいは祈りをこめるさいに弦楽合奏を用いている。弦楽合奏というモノク

ロームの響きの演奏形態を通して、新しい構想のデッサンを行ったのだろう。低音弦楽器から深々とした響きを引き出したかのようにヴァイオリンをアルペジオで軽やかに上昇させたり、複数のパートを鋭利な旋律進行に収束させたり、それとは対照的に優しいメロディーに融和させたり、というように、実際には、デッサンを超えて緻密でしなやかな、ダイナミック・レンジの豊かな響きの彫塑を出現させる。

「訓練と休息の音楽」は、プエルトリコ人のボクサーのホゼー・トレスに取材したドキュメント映画「ホゼー・トレス」のトレーニング風景と、トレーニング後のくつろいだ場面の音楽。冒頭には「快速に。ジャズふう、ブルースふう」と書かれている。弱拍にアクセントが付されてシンコペーション・リズムが強調されるほか、リズム・パターンを規則的に繰り返すチェロ、コントラバスと、拍子をすり抜けるようにシンコペーション・リズムによるメロディーを奏するヴィオラ、ヴァイオリンとが心地よいスウィング感をかもし出し、ボクサーの機敏でしなやかな身体の動きを彷彿させる。「感情をこめてゆっくと」の部分では、ヴァイオリンが奏する穏やかなメロディーに他の弦楽器が和弦的に同

調する。

「葬送の音楽」は、井伏鱒二の同名の小説を映画化した「黒い雨」で8月6日の広島原爆投下を回想するシーンの音楽。弦楽合奏の各パートが分岐して声部数がふえると、不穏な響きも度合いを増す。第1ヴァイオリンが高みへと向かう上行旋律を奏するが、他パートは、低い音域でトレモロや同度音反復によって深く沈んだ響きを呈する。しかし胎動を秘めたその響きは、「訓練と休息の音楽」の俊敏な動きや、第3曲「ワルツ」の軽やかな動きの源でもあるだろう。

「ワルツ」は、安部公房の同名の小説を映画化した「他人の顔」のオープニングとビヤ・ホールの場面で演奏される。3/4拍子のワルツのリズムに乗せて、音が舞うかのようなメロディーがヴァイオリン、チェロへと受け継がれる。さらにヴァイオリン、ヴィオラ、チェロにより奏されて、少数の踊りが複数の踊りに広がる光景が浮かび上がる。しかし、アウフタクトの音符にテヌートが指示されていたり、3拍目の音符にクレシェンドを指示して音をふくらませたりするなど、どこか足どりの重さも感じさせる。ワルツの仮面の奥に、ワルツに乗り切れないメランコリックな気分を垣間見るようである。事故で顔に傷を負った男

が、仮面をつけた顔と包帯を巻いた顔の2つの顔を持つという映画が喚起するものを音楽に投影しているのかもしれない。

**作曲年代**：1994～1995年(編曲)

**初演**：1995年3月9日、グスタッド・シネミュージック・フェスティバル(スイス)にて、ウィリアム・ボートン指揮のイングリッシュ・ストリング・オーケストラ

**楽器編成**：弦楽

(榎崎洋子)

ベートーヴェン

## ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品61

「協奏曲の王」とも呼ばれるこのベートーヴェン(1770-1827)作品は、初演時の評判は芳しくなかった。初演は1806年12月23日、アン・デア・ウィーン劇場の指揮者であったフランツ・クレメントのソロで行われたが、当時の新聞批評は、ソリストの演奏を高く評価しているものの、作品に対しては、美しい部分があることを認めつつも、前後の脈絡が薄い点、平凡な楽節の繰り返しに不満を述べている。初演時の批評は特に第1楽章に関しては的はずれというわけでもない。この楽章は確かに長い。冒頭、ティンパニの同音反復は、形を変えつつもさまざまな楽節で顔を出すが、素材としてはシンプルに過ぎる。最初のリトルネルロで木管楽器が主導する2つの主題は弱音の、滑らかな旋律線を描く点で性格が類似しており、対比の要素は弱い。第1ソロの終結部分が明確に属調を確立せず、長大な第2リトルネルロに流れ込む点は、前後の脈絡が薄いという評価に繋がったのかも知れない。同時代の他のヴァイオリン協奏曲に比して、管弦楽の発言権が大きいと、ソロのパートは難しいわりに、全体のなかで栄えるというわけでもない。決してとっつきやすい作品とはいえないのではないだろうか。

**第1楽章**(4/4拍子 アレグロ・マ・ノン・トロppo)は、前述した特徴をもつ長大な

ソナタ楽章。同音反復の動機とレガートな主題を全編に行き渡らせつつ、ヴァイオリン・ソロが3オクターヴ以上の音域を駆使してオーケストラと絡んでいく。短調への傾斜が強い第2ソロの後、冒頭主題が大がかりなトゥッティで再現されるが、聴き手はこの時初めて主調、二長調の明確なフォルテを聴くこととなる。

**第2楽章**(3/4拍子 ラルゲット)は、2つの主題による非常に自由な構成の変奏曲楽章。どちらも歌謡的な性格をもつ点で一致するだけでなく、基本的にはト長調のなかに留まるため、静謐な印象を与える。この楽章は直接フィナーレへと繋がるが、最後の弦楽器によるフォルテは、それまでの静けさを分断する効果をもつ。

**第3楽章**(6/8拍子 アレグロ)は、先行の2つの楽章に比べ、形式的には破格な面が少ないロンド。「ラ・シャス(狩り)」的な性格をもつ主要主題と2種のエピソード主題を中心に構成されている。

**作曲年代**：1806年

**初演**：1806年12月23日ウィーン

**楽器編成**：フルート1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽、ヴァイオリン・ソロ

(安田和信)

## プロコフィエフ

## 交響曲 第7番 嬰ハ短調 作品131

1948年1月、共産党中央委員会主催の音楽家会議で、中央委員会書記ジダーノフによる演説が行われた。世に言うジダーノフ批判である。第2次世界大戦を経て弛緩した空気を引き締め、スターリン体制に適う音楽活動の方向性を再確認すべく、音楽における社会主義リアリズムのあり方が明示された。ムラデリのオペラ《偉大な友情》がこの批判のそもそもの発端であったが、西欧の悪影響から形式主義に陥っているとして、一連の指導的音楽家たちも共に糾弾される。そのなかにはショスタコーヴィチ、ミヤスコフスキー、ハチャトゥリヤン、ポポフらのほか、セルゲイ・プロコフィエフ(1891-1953)の名も含まれていた。

ジダーノフ批判の内容は、作曲家同盟や同盟発行の雑誌『ソヴィエト音楽』で異口同音に繰り返された。プロコフィエフも慣例的な「作曲家の自己批判」として、同盟に手紙を出し、自作が確かに形式主義的で国民に分かりにくい音楽であったことを認めた。さらにその事実気づかせてくれたこと、ソ連音楽の方向性を指し示してくれたことに感謝している。ジダーノフ批判の後、プロコフィエフの脳出血に起因する病状は悪化の一途をたどった。なかでも1941年から手掛け、改訂を繰り返

してきたオペラ《戦争と平和》に対する当局の無理解は、作曲家を精神的に疲弊させた。外出もままならなくなった状態にありながら、プロコフィエフはオペラの改訂、バレエ《石の花》、組曲《冬のかがり火》、《チェロと管弦楽のための交響的協奏曲》と、複数の作品を同時に手掛け、諸手を挙げて歓迎される作品の創作に腐心した。

《交響曲第7番》はこうしたなか、自らの手で完成させた最後の作品で、その努力が報われた作品でもあった。1952年10月の初演は大成功を収めた。プロコフィエフは歓声に應えて舞台上上がったが、これが聴衆の前に姿を見せた最後となった。全4楽章とも非常に明快な形式で書かれており、チャイコフスキーやボロディンに通じる抒情的な主題が顔を覗かせている。終楽章はもともとピアノッシモで終わる内容であったが、初演で指揮を振ったサモスドの勧めにより、直ちに大団円的なフィナーレが書き足された(作曲家がオリジナル版での出版を望んだため、楽譜には付録という形で加筆部分が掲載されている)。おそらくこの変更も功を奏したのであろう、作曲家の死後、作品はレーニン賞を受賞した。

プロコフィエフは初演後、これが若者

に捧げられた作品で、ソ連の若人の精神の美しさと強さ、人生の喜び、未来への躍動を描いたと語った。だが第1楽章冒頭主題の悲哀に溢れた情感や、オリジナル版における作品の終わらせ方は、長い人生の悲喜こもごもを感じさせる。また、第1、第4主題で登場する、海原の飛翔のような循環主題、中間楽章の穏やかな目線、第4楽章の躍動感からは、病床に伏した最晩年においてなお、ますます情熱的に抱いていた作曲家の不屈の創作意欲とその喜びが伝わってくる。

**第1楽章** モデラート 嬰ハ短調、4/4拍子。ソナタ形式。沈痛な響きの第1主題と世界が開けたような清々しさを湛える第2主題との対照が妙。前者の下行モチーフ、後者の上行モチーフがそれぞれの主題の性格を象徴しており、展開部ではこれらのモチーフが拮抗する。展開部の前後とコーダの前には、まるでバレエの場面転換のように軽妙なエピソードが挟まれる。

**第2楽章** アレグレット ヘ長調 3/4拍子。3つの主題が展開する穏やかなワルツ。プロコフィエフのバレエ作品でよく耳にするような、遠隔調への強引な転調、長調・短調どちらに向かうのか惑わすフェイント、挑発的に跳躍する抑揚が楽しい。

**第3楽章** アンダンテ・エスプレッシヴォ

変イ長調 4/4拍子。2つの主題による穏やかな緩徐楽章。バレエ《ロメオとジュリエット》でジュリエットに想いを寄せるロメオの場面の音楽を想起させる。

**第4楽章** ヴィヴァーチェ 変ニ長調 2/4拍子。5つの主題がエピソード的にめくるめく登場する。そのクライマックスで流れるのは第1楽章の第2主題。これに第1楽章のエピソードが続く（フルート、グロックケンシュピール）。最後にやはり第1楽章の第1主題の抑揚が一瞬の暗い影を投じる。

**作曲年代**：1951年12月～1952年7月5日

**初演**：1952年10月11日、労働者会館ホール（モスクワ）、サミュエル・サモスード指揮、ソヴィエト・ラジオ放送管弦楽団

**楽器編成**：フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、イングリッシュホルン1、クラリネット2、バスクラリネット1、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、大太鼓、小太鼓、トライアングル、シンバル、タンブリン、ウッドブロック、グロックケンシュピール、シロフォン、ハープ1、ピアノ1、弦楽

(中田朱美)

## チャイコフスキー スラヴ行進曲 作品31

1860~1870年代、ロシアでは汎スラヴ主義の思想が席捲していた。スラヴの民族的紐帯を謳い、先のクリミア戦争での敗北による疲弊から、ロシアの人々を国威発揚へと駆り立てた。折しも1875年から相次いで、ボスニア、ヘルツェゴヴィナ、ブルガリア、セルビア、モンテネグロといったスラヴの諸民族が、長くその支配下にあったオスマン・トルコ帝国からの解放を宣言し、独立戦争が勃発する。ロシア国内ではこうした南スラヴ諸国を支援する世論が高まり、スラヴ慈善委員会の活動を後押しした。

スラヴ慈善委員会は1850年代末に創設され、この頃はサンクト・ペテルブルクやモスクワで義勇兵を募り、ブルガリアやセルビアに派遣していた一方で、赤十字協会とともに負傷した兵の手当てを行っていた。汎スラヴ主義は音楽界にも浸透しており、ロシア音楽協会モスクワ支部はスラヴ慈善委員会の活動への資金援助を目的に、1876年にチャリティー演奏会を企画する。この時、ピョートル・チャイコフスキー（1840-1893）が委嘱されて創作したのが《スラヴ行進曲》であった。当初は《スラヴ民謡にもとづくセルビア・ロシア行進曲》と命名され、初演の際もこの表題で披露された。現在の《スラヴ行進曲》となったのは、1879年に出版された楽譜から。おそらくセルビアに限らずに、広くス

ラヴ同胞への意識を前面に出したかったのであろう。

作品には3つのセルビア民謡とリヴォーフ作の帝政ロシア国歌《神よ、皇帝を護りたまえ》が引用されている。一聴しただけでは分かりにくいのが、全体はきれいな複合2部形式となっている。冒頭は演奏表記にあるように「葬送行進曲風」で、悲しげに流れてくる下行旋律はセルビア民謡《太陽は明るく輝かず》。長調の副旋律と推移を挟み、再びこの下行旋律が繰り返される。中間部では一転して軽快なセルビア民謡《懐かしいセルビアの戸口》と、勇壮な同民謡《彼は敵の銃を恐れない》が奏でられ、これにロシア国歌が続く。前半と同じ推移が導入部となり、主部が再現される。《懐かしいセルビア》の性格変奏、ロシア国歌を経て、ファンファーレとともに祝祭的な大団円で幕となる。

**作曲年代**：1876年9月25日完成

**初演**：1876年11月5日、ニコライ・ルビンシテイン指揮、スラヴ慈善委員会のためのロシア音楽協会モスクワ支部交響楽演奏会

**楽器編成**：フルート2、ピッコロ2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、コルネット2、トランペット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、大太鼓、小太鼓、シンバル、タムタム、弦楽

(中田 朱美)

## チャイコフスキー

## ピアノ協奏曲 第1番 変口短調 作品23

チャイコフスキーの作品で生前に初演された120余曲のうち(作品番号のないものも含む)、ロシア、ウクライナ以外の国で初演されたのは8作品にすぎない。うち7作品が協奏曲であった。

協奏曲の初演がロシアから倦厭された理由は言うまでもなく、その難度と斬新さにあった。《ピアノ協奏曲第1番》の場合、すでに冒頭部分から顕著である。まずオーケストラが主要動機を力強く咆哮した後、華やかな序奏主題を奏で、それをピアノが和音連打で伴奏する部分。主要動機のエネルギーをもっぱら受け継ぐのはピアノで、ピアノ・パートはもはやソロ楽器というよりも交響的で、弦楽器群、木管楽器群など同様に、オーケストラ内の鍵盤楽器群といえるほどの勢いである。結果、相当なエネルギーが要求されるピアノには、至る所で力強いオクターヴ連打や、重層的かつ広音域のパッセージが求められる。

当時、チャイコフスキーの器楽曲は、ロシア音楽協会主催の演奏会で初演されることが多かった。作曲家は1874年12月、草稿をモスクワ支部の牽引者で、名ピアニスト兼指揮者であったニコライ・ルビンシテインのもとに持っていき、演奏してみせた。だが、破棄すべき演奏不能な作品と拒絶されてしまう。1870年代、ロシア2

大都市でのピアノ協奏曲のレパートリーは、ショパンの《第1番》、ベートーヴェン、シューマン、もっとも新しいものでブラームスの《第1番》止まりであり、ルビンシテインの耳にチャイコフスキーの協奏曲は新しすぎたのであった。結局、作品は稀代のピアニストで名指揮者でもあった畏友ビューローによって、1875年にアメリカで初演された。ロシアでも徐々に噂は広がり、翌年にはルビンシテイン指揮による演奏会も行われた。

**第1楽章** アレグロ・ノン・トロツポ・エ・モルト・マエストーソ — アレグロ・コン・スピリトリー 変口短調 3/4拍子

**第2楽章** アンダンティーノ・センプリチェ 変ニ長調 6/8拍子

**第3楽章** アレグロ・コン・フォーコ 変口短調 3/4拍子

**作曲年代** : 1874年11月～1875年2月9日、1879年夏に改訂、1888年12月再改訂

**初演** : 1875年10月13日(旧ロシア暦)、ボストン、ハンス・フォン・ビューローによるピアノ・ソロ、ベンジャミン・ラング指揮

**楽器編成** : フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、弦楽、ピアノ・ソロ

(中田 朱美)

チャイコフスキー

## バレエ音楽「くるみ割り人形」第2幕

ピョートル・チャイコフスキーのバレエ音楽《くるみ割り人形》は、作曲家が手掛けた最後の舞台作品。バレエ作品としては《白鳥の湖》、《眠りの森の美女》に続く3作目にあたり、これらは3大バレエと呼ばれて古典バレエの金字塔となっている。《眠りの森の美女》と同様、《くるみ割り人形》はサンクト・ペテルブルクの帝室劇場総支配人、フセヴォロシスキーから1890年の年末に委嘱された。原作は、E.T.A. ホフマンの童話『くるみ割り人形と鼠の王様』を元にしたアレクサンドル・デュマ(父)の『くるみ割り人形物語』で、フセヴォロシスキーと稀代の振付師プティパが台本を手掛けた。初演振付もプティパが行うはずであったが、老齢で叶わず、代わりに弟子のイワノフが行っている。

作品は全2幕3場。音楽は15のナンバーに分かれ、ディヴェルティスマンやパ・ド・ドゥーではさらに小さな性格舞曲がちりばめられている。第1幕第1場はクリスマスの場面。大広間でパーティーが行われ、少女クララは祖父から木製のくるみ割り人形をもらう。その夜、クララがくるみ割り人形を見に行くと、鼠の王様率いる鼠の大軍が押し寄せ、対するくるみ割り人形、おもちゃの兵隊たちとの戦闘が繰り

広げられる。あわやというところでクララが鼠の王様にスリッパを投げて、くるみ割り人形を助ける。くるみ割り人形は王子に変身し、お礼にクララをお菓子の国に連れに行く。

第2場は、お菓子の国に向かう道中が描かれている(情景「松林で」、「雪のワルツ」)。続く第2幕第3場では、お菓子の国でクララが歓迎される様子が描かれるが、この第2幕の物語進行の希薄さ、第1幕との関連性の無さが初演当時、手厳しい批判を招いた。重鎮プティパが中心となって手掛けた台本に従った結果であったが、ともすると作曲家も早くからこのことを危惧していたのかもしれない。チャイコフスキーは全体のオーケストレーションを完成させる前に、このなかから8曲を抜粋して管弦楽による組曲を仕上げ、1892年3月、バレエに先駆けて初演している。その8曲のうち6曲が第2幕からの個性的な楽曲。結果、今ではいずれも誰もが知る有名なメロディーとなっている。チャイコフスキーは3大バレエのいずれも組曲を編んでおり、それは後世の作曲家が倣うところとなった。

第2幕ではいずれも個性豊かな楽曲が並ぶ。なかでも音響面で特筆しておきたいのは、冒頭の2つの情景や「こんぺい糖

の精の踊り」として知られる第14曲中のヴァリエーション(第2)で流れるチェレスタの音。この楽器は今でこそ当たり前に見かけるが、1886年にパリの楽器会社オーギュスト・ミュステルが特許を取ったばかりで、ようやく普及し始めたところであった。そしてチャイコフスキーは1891年6月の手紙で、まだロシアで知られていないチェレスタを誰にも知られずにロシアに運び込むよう指示を出している。第2幕冒頭のチェレスタ・パートに書かれている「ピアノでも代用可能」、「チェレスタのパートを演奏する者は上手なピアニストであること」という注記は、見慣れぬ楽器を目にする当時の演奏者への配慮であった。

第2幕の構成は以下のとおり。

**第1曲** 情景：砂糖の山の魔法の城で

**第2曲** 情景：クララと王子

**第3曲** デイヴェルティスマン：

- a. チョコレート(スペインの踊り)
- b. コーヒー(アラビアの踊り)
- c. お茶(中国の踊り)
- d. トレパーク(ロシアの踊り)
- e. あし笛の踊り
- f. ジゴニーヌおばさんとピエロ

**第4曲** 花のワルツ

**第5曲** パ・ド・ドゥー：序曲——ヴァリエーション(第1) タランテラ——ヴァリアシ

オン(第2)こんべい糖の精の踊り——コーダ

**第6曲** 終わりの円舞曲と大詰め

**作曲年代**：1891年2月～1892年3月

**初演**：1892年12月18日、マリインスキー劇場(サント・ペテルブルク)、リッカルド・ドリゴ指揮、レフ・イワノフ振付

**楽器編成**：フルート3(ピッコロ1)、オーボエ2、イングリッシュホルン1、クラリネット2、バスクラリネット1、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、トライアングル、グロッケンシュピール、大太鼓、シンバル、タンブリン、カスタネット、ハープ2、チェレスタ1、弦楽

(中田 朱美)

## 次回(2月)の定期公演 聴きどころ

### N響初登場となるリリシズムの巨匠ビシュコフ

藤田 茂

～「音楽家は音を超えたものを求めなければならない」



ビシュコフ

©Sheila Rock

2月の定期には、熱烈なるリリシズムの巨匠、セミョーン・ビシュコフがN響の指揮台に初登場する。1952年、まだレニングラードと呼ばれていたサンクト・ペテルブルクに生まれたこの指揮者は、ソヴィエト体制下のロシアを去ったあと、アメリカからキャリアを再構築し、いまや同世代のなかでもっとも活動的な指揮者として、世界中の音楽ファンを魅了している。現在は、ケルン放送交響楽団の首席指揮者。大きく美しく弧を描くビシュコフのタクトが、精鋭ぞろいのN響からどのような響きをひきだしてくれるのか。待ちに待った組み合わせに、今から期待が高まる。

#### ■ 定評あるショスタコーヴィチと 棒さばきが堪能できる ストラヴィンスキーのAプロ

Aプロの最初を飾るのは、すでにその解釈の深さに定評がある、ショスタコーヴィチ。レニングラード音楽院の大秀才であったビシュコフが、同じくレニングラード音楽院の恐るべき子どもとして知られた先輩ショスタコーヴィチの卒業作品、《交響曲第1番》を振る。ソヴィエト体制下の時代の空気を知るものが、あの懐の深い大きな表現でもって、この音楽の底にある人間の不安や希望にどのような声を与えるのか、真摯に向き合いたい。

そして、この《第1番》と組み合わせられるのが、現代音楽の古典ともいえるべき、ストラヴィンスキーの《春の祭典》。少女の生贄を春の神に捧げる、というのがもとのバレエのテーマだから、音楽もまた強烈なダイナミズムを有しているのだけれど、もちろんそれだけではない。《春の祭典》は作曲家の緻密な計算のもとに成り立っている音楽だ。こういう作品こそビシュコフで聴いてみたいし、見てみたい。いくつもの声部を振り分けるビシュコフ

の棒さばきを堪能できる、またとない機会となるに違いない。

## ■濃厚なロマンチズムに触れるBプロ

Bプロには、ビシュコフならではの濃厚なロマンチズムに触れることのできる、これまたロシア作曲家による2つの作品が並ぶ。1つはラフマニノフの《ピアノ協奏曲第2番》。ソリストとして迎えるのは、1977年生まれのロシア人ピアニスト、アレクセイ・ヴォロディン。まだ30代前半ながら、着実にファンを増やしている有望株である。ロシアの鐘の音を模したピアノのソロに始まる、雄大な音の波。ビシュコフのタクトが、この波をどのように盛り



ヴォロディン ©Andrea Felvig

たてるのか、期待が集まる。そして、これとカップリングされるのがチャイコフスキーの《交響曲第4番》。これは、結婚生活が破たんするとともにメック夫人との奇妙な交際が始まる、チャイコフスキーの人生の転機に書かれた作品である。深くロシア的でありながら、ドイツ流の交響曲の原理に対する鋭い洞察が含まれる

《第4番》は、ビシュコフ自身の音楽家としての歩みに重なる。N響がさまざまな指揮者と何度となく演奏してきたこの作品を、ビシュコフはどのように表現するだろうか。

## ■愛をキーワードとしたCプロ

Cプロでは、ワーグナーの《トリスタンとイゾルデ》から「前奏曲と愛の死」、そして、これにつづいて、マーラーの《交響曲第5番》が演奏される。前者が愛ゆえの死であるならば、後者は愛ゆえに生きようとする人間の生きざまを描く作品といえようか。いずれも愛をキーワードとした、ドイツ後期ロマン派のきわめてメッセージ性の強い音楽である。オペラ指揮者としても積極的な活動を繰り広げるビシュコフが、これらの作品を通して、何を語りかけてくるのか、とても楽しみだ。

ビシュコフはさるインタビューのなかで、こんなことをいっている。「音楽家は音を超えたものを求めなければならない。それは地平線のようなもので、一步踏み出せばまだ遠ざかる。だから音楽家の仕事には終わりが無い」。決して到達できないがゆえに求めずにはいられないものがある。2月の定期演奏会は、そのプログラムを見ても、マエストロ・ビシュコフの音楽家としての、また人間としての姿勢が存分に現れる、濃密な演奏会になるに違いない。

(ふじた・しげる 音楽学・東京音楽大学講師)